

ルカによる福音書3章「主の道備え」

1A 荒野で叫ぶ者の声 1-20

1B 悔い改めのバプテスマ 1-18

1C 支配者たち 1-6

2C 悔い改めの実 7-14

3C 聖霊と火のバプテスマ 15-18

2B さらなる悪事 19-20

2A 共にバプテスマを受けられる方 21-38

1B 鳩のような聖霊 21-22

2B 第二のアダム 23-38

本文

ルカによる福音書 3 章を開いてください。私たちは、ヨハネの誕生とイエス様の誕生の場面を読みました。そして、3 章からヨハネの公生涯とイエス様の公生涯の始まりを読みます。

1A 荒野で叫ぶ者の声 1-20

1B 悔い改めのバプテスマ 1-18

1C 支配者たち 1-6

1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督であり、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイトラヤとトラコニテ地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。

先週の学び、2 章において、イエス様の誕生がいつだったのか、皇帝アウグストゥスの名を出し、またシリアの総督の名前まで出して、それが歴史の中で起こったことをルカは明らかにしました。ここでも同じです。イエス様の公生涯は、ヨハネの福音宣教から始まりますが、その時期をはっきりさせています。まず、皇帝はティベリウスです。紀元後 14 年から 37 年まで在位していました。ですので、第十五年は 29 年になります。ローマ帝国の初代皇帝がアウグストゥスですが、彼は第二の皇帝です。アウグストゥスの養子になりました。イエス様の公生涯における皇帝、カエサルといえば、ティベリウスのことです。

そして政治的な背景は、とても複雑です。ローマが支配していましたが、ユダヤ人の住む地域はヘロデ家が統治していました。ヘロデ大王が、ローマに承認されてユダヤ人を治めていました。ローマと協調的な関係でいるようにさせました。この彼が、「ユダヤ人の王」と呼ばれていました。しかし彼自身はユダヤ人ではなく、エドム人の新約時代の呼び名、イドマヤ人であり、ハスモン時代

の時にユダヤ教に強制的に改宗させられていました。なので、彼は改宗者であり、エルサレムに神殿も建てたのですが、それでもユダヤ人からは信用されていませんでした。

ヘロデ大王が紀元前 4 年に死に、その土地は息子に分割統治されました。最年長のアルケラオにはユダヤ地方を、アンティパスにはガリラヤ地方を、そしてピリポにはトラコニテ地方をヘロデ大王は遺言で残しました。トラコニテはガリラヤ湖の北東部分の地域で、「ピリポ・カイサリア」はこのピリポのことです。そして、ここに「ヘロデがガリラヤの領主」とありますね。つまり、このヘロデは、ヘロデ・アンティパスのことです。したがって、イエス様の公生涯の時に「ヘロデ」と出てきたら、ヘロデ・アンティパスのことであること知ってください。そして、アルケラオは非常に残酷な人で有名でした。マタイ 2 章で、ヨセフの家族がベツレヘムからエジプトに逃げて、ヘロデ大王が死んだけれどもアルケラオがユダヤを治めていると聞いたので、「2:22 **そこに行くのを恐れた。**」とあります。そして、夢でさらに警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いたとあります。しかし、アルケラオは度重なる失政によって、紀元後 6 年頃に住民によってローマに訴えられ、領主を解任させられました。

それで、ユダヤ地方はローマ帝国の直轄領となったのです。ユダヤ属州と言います。そこで、ピラトが登場するのです。「**ポンティオ・ピラトがユダヤの総督**」とあるのです。在任が 26 年から 36 年という短い期間でしたが、その間にイエス様に十字架刑を宣告したことによって、一躍有名になります。初代教会から使徒信条というものを唱えています。が、「**ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ**」とあるわけです。

このように政治的な環境はとても複雑です。さらにユダヤ教の中も複雑になっていました。「**アンナスとカヤパが大祭司であったころ**」とあります。大祭司が二人もいました。これは、おかしいですね、モーセの律法には大祭司が一人しか任命されていません。アンナスは、元大祭司です。そして、イエス様の公生涯の時も彼は生きていました。本来、大祭司は死ぬまでその務めを担います。けれども、当時、ハスモン朝の時代から大祭司は王と同じように政治的な力を持っていました。それで、ローマが政治的に支配しないといけないと思いました。それで大祭司の職をローマが任命していたのです。アンナスの婿である、カヤパを任命したのです。しかしユダヤ人たちの間では、アンナスは依然として影響力を持っていたのです。ヨハネの福音書には、イエス様がカヤパの前に連れて来られる前に、アンナスの前に連れて来られているのを記録しています。

そしてこのような状況の中において、「**神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。**」とあります。当時のユダヤ人は、多くの圧迫を受けていました。王の王、主の主であられる神が支配者でなければならぬのに、ティベリウスが皇帝として君臨しています。ユダヤ人の王はキリストでなければいけないのに、ヘロデが支配しています。またピラトが総督であり、多神教を押し付けてきます。そして祭司が頼りなのに、祭司までがローマに支配され、本人も墮落していました。彼らが期待するのは、これら歪んだものを来るべき方、メシア、キリストが真っ直ぐにしてくださいことです。

3 ヨハネはヨルダン川周辺のすべての地域に行って、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。

午前礼拝で学びましたが、ヨハネは、これらのことから解放される福音を語りませんでした。そうではなく、「罪の赦しに導く悔い改め」を説いたのです。ローマから、ヘロデからの解放ではなく、自分自身の宿罪からの解放です。解放されるために、まずその負債を帳消しにします。罪を赦してください。その良き知らせを受け取るためには、私たちの心が整えられないといけません。悔い改めによる整えです。私たちの心は絶えず外側に向けられますが、まず自分自身が神の前で悔い改めるのです。そして、「バプテスマ」ですが、浸かることです。例えば、ある人が自分の親が死んで悲しみの中に沈むとき、その人は、「悲しみのバプテスマを受ける。」とすることができます。したがって、「悔い改めのバプテスマ」とは、悔い改めの中に浸かる、悔い改めを心から行うということです。ユダヤ人はしばしば清めのために全身浸かる儀式を行っていましたが、悔い改めの中に浸かりなさいとヨハネは説いています。

そして場所ですが、「ヨルダン川周辺のすべての地域」であります。そして荒野でありますが、ヨルダン川が死海に入る地域は、ユダの荒野と呼ばれます。ユダの荒野は、実はオリーブ山から東に、既に広がって行きます。ユダの山地で地中海からの湿気のある空気が雨で落ちて、乾燥した空気のみが東に流れるので、荒野になるのです。しかも、ヨルダン川の周辺は、世界で最も低い陸地になっています。それゆえ、暑いのです。

そこになぜヨハネがいたのか？と言いますと、ガブリエルがザカリヤに言った言葉、「1:17 彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。」というところです。エリヤは、アハズ王に雨が降らなくなることを告げると、ヨルダン川に生き、そこで水を飲み、鳥が持ってくる肉とパンで命をつなぎました。そして、エリヤはエリシャが付いてくるところで外套でヨルダン川を分け、そこから火の戦車によって天に引き上げられました。さらに遡ると、神の約束が実現していくのはヨシュアたちがヨルダン川を渡るところから始まります。したがって、ここから新たに神の約束が実現していくその分岐点であるわけです。ここから、キリストによる新しい時代の、御霊の働きが起こるのです。

4 これは、預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。5 すべての谷は埋められ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい道は平らになる。6 こうして、すべての者が神の救いを見る。』」

引用されている、預言者イザヤのこの言葉は、40 章からです。イザヤはその預言の前半を、神の裁きの宣言に主に費やしました。しかし 40 章で、がらっと変わります。それは、自分たちの罪のゆえにバビロンに捕囚にされた者たちが、神の一方的な憐れみによって解放されて、エルサレム

に帰還できることを約束している、というのが背景です。そして、エルサレムには後の日に、異邦人の王ではなく、まことの王が来る、神が王として支配してくださるという約束に続きます。その前に、「荒野で叫ぶ者の声がある」とあるのです。神の救いを仰ぎ見る前に、人々の心が真っ直ぐにされるべく、この声かけがあるのだということです。王がある地方を通るとき、その前にやって来て、道を整えるように命じる人が来ることを話しています。平らな道にするために、へこんでいるところは埋めて、高くなっているところは低くされます。同じように、低められている者、卑しめられている者、心貧しくしている者は埋められて高くされ、高ぶっている者は低くされて、すべての者が自分を罪から救う神を仰ぎ見るようになります。

ここで、「主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。」という言葉で、「用意せよ」というのは、「一発で」というようなニュアンスがあります。それに対して、「まっすぐにせよ」というのは、「まっすぐにしていなさい」みたいなニュアンスがあります。つまり、主の道を直ちに用意しなさい、そして主の通られる道を真っ直ぐにしていなさい、というような言葉です。これは、実に悔い改めの姿勢を示しています。悔い改めるとは、思い直すことです。一発で、直ちに思いを変えることです。徐々に変わるものではありません、とっとと変えるのです。そして、その思いを変えた状態を保っておくことです。思い直しても、そこに留まっていなければ、結局、同じことの繰り返しです。そうではなく、思い直した結果、そのことを持続させることです。

2C 悔い改めの実 7-14

7 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

いつものような清めの儀式のように、水に浸かればよいのかと思ったのでしょうか、群衆がバプテスマを受けようとしてきます。けれども、ヨハネが説いたのは、燃えかる神の怒りです。預言者マラキが、「4:5 見よ、わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」と言いました。この、大いなる裁きをヨハネも語っているのです。しかしユダヤ人は、自分たちがアブラハムの子孫だから必ず残り、つまり天地が減んでも救われると信じていました。そこでヨハネは、「あなたがたはアブラハムの子孫ではなく、まむしの子孫だ！」と叫ぶのです。アブラハムの子であれば、アブラハムらしく生きていなければいけないのに、まるで、まむしのように毒を出して生きているではないか、ということです。

さらに、「石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができる」と言っていますが、彼らが減んだところで、神はご自分の約束を果たされるのだ。石ころしなくとも、それから子孫を出せるのだ

ということです。私たちも、神の一方的な憐れみで選ばれたのに、何か自分たちが特別な存在だと勘違いしてしまいます。しかし、神が裁きの御手を置かれたら、またたく間に滅んでしまうのです。憐れみに留まっているからこそ、神の選びの民なのです。そして、「斧もすでに木の根元に置かれています。」という比喻は、実を結ばない木は役に立たないから切り倒すことを意味しています。実を結ばないのであれば、焼かれるというのは、他の預言書にも出ていますし、何よりもイエス様が、弟子たちに実を結ばないぶどうの木は焼かれてしまうということです。ですから、悔い改めて、悔い改めの実を本当に結んでいるのか、私たちは吟味する必要があります。

10 群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」11 ヨハネは答えた。「下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。食べ物を持っている人も同じようにしなさい。」12 取税人たちもバプテスマを受けにやって来て、ヨハネに言った。「先生、私たちはどうすればよいのでしょうか。」13 ヨハネは彼らに言った。「決められた以上には、何も取り立ててはいけません。」14 兵士たちもヨハネに尋ねた。「この私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だれからも、金を力づくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

興味深いですね、午前礼拝で話しましたが、それぞれの人に対してそれにふさわしい助言を与えています。群衆は基本、貧しいです。下着が二枚というのは、実際にそうだったから二枚と言ったのだと思います。それに対して、取税人は金持ちです。そして民から金をだまし取っています。兵士は、ここではローマ兵ではなく、ヘロデの親衛隊だったのかもしれませんが。彼らは力を持っています、だから民を虐げる側にいます。しかし、すべてが罪人だったのです。群衆にも罪があり、自分たちが二枚しか持っていないから分け与えないという思いを持っていました。しかし、彼らのそこに実は自分の欲があり、罪がありました。

その反面、取税人に対しては、「決められた以上には、何も取り立ててはいけません。」と言っています。兵士に対しても、「だれからも、金を力づくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」と言っています。どちらも、「その職業は汚らわしいから、悪に染まっているからやめなさい」と言っていないことです。群衆としては、彼らこそが滅びるに値する存在だと思ってもおかしくありません。しかし、決められた以上は取り立ててはいけないということは、決められたものは取り立ててよい、ということになります。つまり、取税人は正直な取税人を目指してよいのです。兵士も兵士でその務めを全うし、その中で悔い改めるのです。ここに徹底して、先ほどの「すべての者が神の救いを見る」があります。

3C 聖霊と火のバプテスマ 15-18

15 人々はキリストを待ち望んでいたもので、みなヨハネのことを、もしかするとこの方がキリストではないか、と心の中で考えていた。

ヨハネの宣教活動を見て、人々が彼がキリストではないか？とってしまう、その状況を私たちが推し量るのは難しいです。「人々はキリストを待ち望んでいた」とありますが、当時は、相当なメシア待望があったと言われます。ガラテヤ4章4節に、「しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。」とあります。時が満ちていました。私も、イスラエル旅行に何度か行き、そこでの遺跡やガイドさんの説明を聞きながら、メシア到来の熱望が頂点に達していた、その空気を感じました。要は、バビロンから始まる異邦人の支配が500年以上も続いているからです。ダニエル書にある幻が、その支配の横暴さを物語っています。

当時、ユダヤ人のそれぞれのグループが、メシア到来を期待するのにいろいろな動きをしていました。祭司たちの属するサドカイ派は、エリートで、ローマの支配と妥協しながら神殿礼拝を最も大事にしていました。パリサイ派は反対に、神の律法を厳格に守ることによって、ローマとの壁を作っていたのです。そしてエッセネ派という人々もいました。彼らはローマの支配そのものから逃避して、死海のほとりなど、荒野の洞窟に隠れて共同生活をしていました。そして熱心党がいました。イエス様の弟子、シモンがそうでしたね。彼らはあくまでもローマを武力で打倒すべく対抗していたのです。十字架に付けられるユダヤ人たちの多くが、そうした熱心党の考え方を持っていたと思われる。いろいろな動きをしていましたが、根底に、心の奥深いところにユダヤ人たちは、自分たちを救ってくださるメシア、キリストを待ち望んでいて、その期待感が頂点に達していたのです。

16 そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。17 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

ヨハネは、一気に自分を低く下げています。自分は、あくまでも主の道備えをしている荒野の声であり、主ご自身が間もなく来られることを証したのです。水でバプテスマを授けているけれども、神の聖霊ご自身で主はバプテスマを授けられるのだと、本物が来ることを伝えています。自分はあくまでも証し人、そしてその証し人は神ご自身に他ならないことを話しています。

「私よりも力のある方」とヨハネは言っていますが、これは、神の御霊の力で動いている預言者ヨハネと、力ある神ご自身であるキリストの違いです。キリストは、このようにイザヤによって預言されています。「9:6 主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」ヨハネは、エリヤの霊と力、すなわち神の御霊が働いていますが、しかし、キリストは神ご自身なのです。次に彼は、「その方の履き物のひもを解く資格もありません」と言っています。当時の履き物はサンダルでした。それを解くのは僕の仕事であり、しばしば異邦人の奴隷なのです。そうした最も低い身分の仕事の資格さえないと言い切っています。ヨハネは、正しくメ

シア、キリストを見えています。主ご自身であられる方がどれだけ力強く、大きい方なのかを知っていれば、その証しを立てているだけの人間が誇り高ぶることが、どれだけ愚かなことかということです。人間はどうしても、神ご自身ではなく、その用いられている器に注目します。しかし、それが神の栄光を見えなくさせます。

そして、聖霊によってバプテスマと言っているだけでなく、火によるバプテスマであるとヨハネは証言します。使徒 2 章で、弟子たちが一同に祈っている時に、聖霊が臨まれたのですが、その時に「2:3 炎のような舌が別れて現れ、一人ひとりの上にとどまった。」とあります。それから彼らが、御霊が語らせてくださるままに、他国のいろいろな言葉で話し始めましたが、聖霊と火によるバプテスマです。しかし、ヨハネは終わりの日における、神の火による裁きに浸ることになる、神の裁きのバプテスマを受けることになるとも警告しています。脱穀をする時に、箕をもって空中に麦を上げます。すると、種だけが落ちて、軽い殻の部分は風に吹かれます。脱穀ですが、自分が悔い改めの実を結んでいる、その霊的な果実の有る者たちは倉に納められる、つまり神の国に招き入れられますが、殻は御国の外にある、ヒノムの谷の焼却場のように絶えず火で燃えているゲヘナに投げ込まれると言っているのです。

ルカは、後の書、すなわち使徒の働きで、聖霊のバプテスマについて、ヨハネが伝えた神の約束がどのように実現していったのかを克明に記しています。つまり、現代に至るまで教会に与えられた約束であるのです。悔い改めることは、罪の赦しのために必然です。悔い改めることによって、罪赦され、そこで神の聖霊の働きを受け取る心が整えられます。

18 このようにヨハネは、ほかにも多くのことを勧めながら、人々に福音を伝えた。

ヨハネは、神の御怒りが下ることをこのように伝えていましたが、それはあくまでも彼らが罪の赦しを受けて、救われるためでした。これが福音、良い知らせです。そして、その福音はキリストご自身が来られることによってもたらされると彼は伝えたのです。

2B さらなる悪事 19-20

19 しかし領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロディアのことで、自分が行った悪事のすべてをヨハネに非難されたので、20 すべての悪事にもう一つ悪事に加え、ヨハネを牢に閉じ込めた。

先ほど出てきたヘロデ・アンティパスのことです。彼の支配していたのはガリラヤでありましたが、その他、ペレアというヨルダン川の東岸の細長い地域を支配していました。そこが、ヨハネが活動していたヨルダン川周辺と重なっていたのです。ヘロデはあくまでも、改宗者のユダヤ教徒です。ですからここで、ヨハネが非難したのはユダヤ人の律法に違反していることです。何が違反しているかと言いますと、ヘロディアというのはピリポの妻だったのです。自分自身は他の妻がいました

が離縁して、ヘロディアもピリポと別れました。しかしユダヤ教では、夫が妻を離縁できても、妻が夫を離縁できません。つまり、彼女はピリポの妻でありながら、かつヘロデ・アンティパスの妻にもなったのです。これが許しがたいことでした。姦淫の罪の極みです。先にヨハネが、まむしの子孫よ！と齒に衣着せぬ言い方をしていましたが、ヘロデにも同じように言ったのでしょう。しかし、ヘロデはこの正しい人を牢に閉じ込めました。悔い改めなかったのです。

この後にすぐに、イエス様の宣教の話に続きます。ヨハネが福音を伝えたように、イエス様も福音を伝えます。連続していますが、ヨハネが迫害を受けたように、イエス様も迫害を受けます。主のしもべを迫害する者は、主ご自身をも迫害するということです。

2A 共にバプテスマを受けられる方 21-38

1B 鳩のような聖霊 21-22

21 さて、民がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマを受けられた。そして祈っておられると、天が開け、22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

ヨハネの宣教の言葉を聞けば、さぞかし主ご自身は火によって、悔い改めない者たちをことごとく滅ぼされる方として来られるように聞こえますが、実際のキリストはなんと、ヨハネのバプテスマを受けられたのです。民がバプテスマを受けてきたのに混じって、ご自身もバプテスマを受けられました。なぜか？これは、イエス様が主の慰めをもたらす方だからです。悔い改めた者たちに対して、神の豊かな憐れみを注がれる方だからです。神であられるのに、人と一つになってくださいました。人となってくださることによって、私たちも神を信じて生きるとはどういうことなのか、イエス様に倣って生きることができます。

ルカは、他の福音書にはないことを書き記してくれています。「祈っておられると」とあります。イエス様がいかに祈られる方であるか、ルカは教えてくれています。ヨルダン川の中に入られ、そこから出て来て祈っておられたのでしょう。すると、天が開けて聖霊が降って来られたのです。イエス様は後に、「11:13 天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」と言われます。私たちが聖霊の満たしを受けるのに、祈り求めるということがここで必要であることを知ります。

そして、聖霊が火と共にヨハネが語ったのに対して、イエス様には「鳩のような形をして」下って来られています。かつてこのヨルダン川のところで、エリヤは火の戦車に乗って天に引き上げられました。そしてエリシャは、その外套をもってヨルダン川を分けて渡りました。その後の彼の働きは、命を与え、癒す働きでした。エリコでは、飲めなくなっていた水をきれいにしました。エリヤによる、神の火による裁きから、人々の必要に応える働きに変わりました。そして、もう一つの話思い出してください、鳩が出てきた出来事です。ノアの箱舟ですね。箱舟の外にいる人々は、水によって

全てが滅んでしまいました。しかし雨が止み、水かさも減って行き、その証拠が鳩が、木の若枝の歯を口に加えていたことであります。神の裁きは厳然としてありますが、しかし悔い改める者、へりくだる者、心貧しくしている者たちには、それを上回る神の優しさと憐れみ、慰めに満たされます。

そして天の父からの声があります。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」ここに、父と子の間にある関係が明らかにされています。イエス様は、成長された時に、「2:52 神と人にいつくしまれ」とありました。父なる神にも、また肉の両親にも愛されて育ちました。そして今、父なる神は、ご自分の子に対する愛を無限に注いでおられます。そして、この方が確かに、ご自分の使命を果たすのにふさわしい者として十分であることを、ここで認証しておられるのです。それが、「喜ぶ」という言葉に表れています。満足しているということです。云わば、父なる神のご自分の子に対する任命式です。

2B 第二のアダム 23-38

次に、イエスについての、興味深い系図があります。

23a イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で、ヨセフの子と考えられていた。

イエス様が働きを始められるにあたって、旧約時代の預言者もそうですが、初めに系図が書かれています。モーセがアロンと共にファラオの前に出る時に、出エジプト記 6 章ですが、二人がレビ族から出てきたものであることが系図によって示されています。そして、「およそ三十歳」とありますが、とすると、六か月ぐらい早く生まれたヨハネも三十歳ごろに活動を始めたこととなります。ヨハネは、ザアカイの子であり祭司の子です。民数記 4 章に、幕屋で務めることのできる年齢が、三十歳以上五十歳までとあります。三十歳というのは、主に仕える働きをする始まりというのが、ユダヤ人の中にありました。

そして、「ヨセフの子と考えられていた」とありますが、その通りです。イエス様は、ヨセフではなく、聖霊によってマリアの胎からお生まれになりました。

32b ヨセフはエリの子で、さかのぼると、24 マタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、25 マタティア、アモス、ナホム、エスリ、ナガイ、26 マハテ、マタティア、シメイ、ヨセク、ヨダ、27 ヨハナン、レサ、ゼルバベル、シェアルティエル、ネリ、28 メルキ、アディ、コサム、エルマダム、エル、29 ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、30 シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エルヤキム、31 メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、

ヨセフはエリの子であるとありますが、実はこれはマリアの系図であることが分かります。マタイの福音書では、ヨセフの父はヤコブだからです(1:16)。当時、女系の系図というのは存在しませ

んでした。ですから、ヨセフと書いていますが、ヨセフの義父エリから始めているのです。そしてさかのぼって系図を書いています。

ここで特徴的なのは、マリアの父祖もダビデであったということです。ヨセフの系図は、ダビデの子がソロモンで、ソロモンからの子なのですが、マリアは「ナタン」とあります。ナタンは、ソロモンの弟だったのでしょうか、同じバテ・シェバから生まれている子です（Ⅰ歴代 3:5）。興味深いことに、イエス様は、両親ともダビデの家系だったということです。ヨセフの家系はいわば正統な王家です。ソロモンがダビデの世継ぎをして、それからユダ王国で代々の王が出て来ました。ところが、ユダが墮落して、エホヤキン、別名をエコヌヤと言いますが、エレミヤの預言の中に神の裁きとして、「22:30 彼の子孫のうち一人も、ダビデの王座に着いて栄え、再びユダを治める者はいないからだ。」とあります。ここで途切れてしまっているのです。しかし、ダビデの家から世継ぎの子が永遠の御国を治めるという、ダビデに対する約束は、マリアからの系図で保証されているのです。

32 エッサイ、オベデ、ボアズ、サラ、ナフシオン、33 アミナダブ、アデミン、アルニ、ヘツロン、ペレツ、ユダ、34 ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、35 セルグ、レウ、ペレグ、エベル、シェラ、36 ケナン、アルパクシャデ、セム、ノア、レメク、37 メトシェラ、エノク、ヤレデ、マハラルエル、ケナン、38 エノシュ、セツ、アダム、そして神に至る。

ルカは、アダムにまで、そして神ご自身にまでの系図を残しています。マタイの福音書は、アブラハムからの系図であり、確かにイエス様はアブラハムの子孫、ユダヤ人としてお生まれになったということを強調しているのに対して、ルカは、確かにイエス様はアダムの子としてお生まれになったのだということです。しかし、実は、聖霊によってマリアがイエス様を身ごもっており、神の子であられるのです。神でありながら、人となられたということです。

イエス様はそれで、云わば「第二のアダム」であります。アダムが神に造られた者として生きていたのに、命令に従わず失敗しました。そのために全人類に罪が入りました。しかし、今度はキリストが人として生きられていくなかで、アダムが失敗したところを神に忠実に従うことによって踏み直していくことによって、キリストの義が信じる者に入ってくるのです。ちょうどこれは、オセロで真っ黒にされてしまったところ、天才的なプレーヤーが一つの白い駒で、すべてを白に塗り替えていくようなことです。罪はアダムによって広まりましたが、神の義はキリストにあって信じる者に広まって行くのです（ローマ 5 章参照）。

これからイエス様をぜひ、「遠く離れた方」ではなく、「身近な方」として接してください。自分が通っている弱さは、イエス様には関係ないのではなく、いや、イエス様こそがその弱さの中におられるのだということを知ってください。主はすぐそばにおられます。そして助けてくださいます。